

三神宮秋季例祭 伝統の神馬奉納

三神宮秋季例祭における神馬奉納は、伝統的に40歳を迎える旧宮原町出身の男女を中心として行われます。今年も、昭和49年生まれである、男女31人の49年会の皆さんがその重責を担いました。ここでは、その発足から秋季例祭における神馬奉納までの、約1カ月をご紹介します。

発足式

9月6日、三神宮秋季例祭神馬奉納発足式が行われました。

式には、三神宮宮司の廣松國房さんをはじめ関係者が出席。49年会を代表して、千々波会長が「神馬奉納という責任の重さを実感しています。一致団結し、精一杯努力します」とあいさつを述べ、決意を新たにしました。



▲あいさつを述べる千々波会長

安全祈願祭

9月7日、神職による清祓いの儀が行われ、神馬奉納における安全を祈願しました。

この日は、神馬の馬引きの練習始めでもあり、神馬の力強さに圧倒されながらも、先輩の指導を受けながら、その技術を習得しました。



▲神職による神馬の清祓

飾り出し

9月27日、10月4日に飾り出しが行われました。飾り出しは、その年に奉納される神馬を、氏子にお披露目するために行われるものです。早朝から長時間にわたり、町内を周りましたが、皆さんからは疲労を感じさせない、充実した表情が見られました。



▲町内を力強く駆け抜けました



▲町内各施設を訪問

本祭

10月13日、緊張感に包まれた中、本祭を迎えました。台風19号の接近により、荒天の中の開催となりましたが、神馬奉納時には雨も上がり、無事に奉納が行われました。境内での馬引きの際には、多くの見物者でにぎわい、神馬が駆け抜けたたびに、歓声が響いていました。



▲勇壮な馬引きに大きな歓声



▲女性たちのサポートが常にありました

氷川町には古くから継承されてきた、さまざまな伝統行事があります。ここでは、それらの一部をご紹介します。



早尾のドラ打ち

早尾のドラは大きなケヤキの胴体の両面に、それぞれ一頭分の牛皮を張ってある大太鼓のことで、銅鑼の音に似ていることから、ドラと呼ばれていると言われています。

ドラ打ちは、季節的な定めがあり、部落全戸の田植えが済んだ後に打ち出し、台風季節の八朔直前に打ち終わりました。

また、楽器の他、火災、水害などの出動の招集や部落会合の合図に使われました。



早尾のスッキョン

早尾のスッキョンは、早尾地区に伝わる成人式の儀式です。

ザボンやシュロの表皮で作った男性器の模型を用いる奇習で、現在は地区の消防団への入団の儀式として行われています。



川上の餅つき

川上地区に伝わる餅つきは、10人ほどの男性が1個の臼の周りを飛び回る行事です。

起源ははっきりしていませんが、江戸時代の終りごろ、山伏が困っていたときに助けたお礼として、教えられたと言われています。

主に雨乞いのために行われますが、建物の落成祝いや道路の開通祝いなどにも行われていたと言われています。



高塚雨乞い太鼓

高塚雨乞い太鼓は、高塚乱橋地区に伝承されていたもので、由来ははっきりしていません。

江戸時代の干ばつの際に、農民たちが神々への願いを込めてドラや太鼓を打ち鳴らし、天地を振るい起こさせ、恵の雨を降らせようとしたのだと考えられています。

現在も残る太鼓は明治16年に作られたもので、直径が124cmもある巨大なものです。



49年会三神宮神馬奉納実行委員会 会長 千々波嘉久さん(新南)

今回、49年会の会長を務めさせていただきました。発足式後、神馬奉納の重責を痛感しましたが、同級生と準備、練習を続けるうちに、一致団結し、次第に楽しむことができるようになりました。

本祭は、台風により開催が危ぶまれましたが「台風で終わらせたくない」という同級生の言葉、廣松宮司の「頑張ってもらいたい」という激励を受け、無事に神馬奉納を終えることができました。今後は、歴代の先輩方から受け継いだ伝統を後輩につなげていきます。

多くの先輩、後輩、関係者の皆さんの協力があったの神馬奉納であったと感じています。ありがとうございました。